

リ・モンスター
Re:Monster
金斬兎狐 Kanekiru Kogitsune
8.5

Main Characters
主な登場人物

オーロ

オバ朗の長女。
強い父に憧れ、
自己鍛錬の日々を送る。

アルジェント

オバ朗の長男。
強い父に憧れ、
自己鍛錬の日々を送る。



ラン・ベル

イル・イーラ族の若き
女狩人にして、
将来の【狩猟の勇者】。



アースティ

【獣王】ライオネルの愛娘。
獣王国において父に次ぐ
実力を持つ。

異界の賢者

王国に住む謎の老人。
数々の超有用アイテムを
開発し続けている。



エッセバ

《クーデルン大森林》に
住むエルフの氏族を
束ねる族長。

シュベルス

エッセバの弟。
二百年前に出奔し、
商人として財を成した。



目次

弓天直下きゆうてんちようか〈ラン・ベルの過去〉 7

這はい寄よる恐怖こふ〈諜報員達の体験話〉 93

そうだ、温泉に行こう〈エルフ達の噂話〉 125

とある攻略者と団員の関係
〈攻略者ルーキー・ベルルフの奮闘／仕事熱心な迷宮運送業者ホプ雷の営業〉 159

子供達の戦い〈アルジェントは苦勞する／オーロは鬼生を謳歌する〉 187

賢者之年けんじやのとしの日常よ 215

獸心じゆうしん覚醒かくせい〈親心と子心〉 247

きゅうてんちょっか
弓天直下

〈ラン・ベルの過去〉



アプリ「Re:Monster ～ゴブリン転生記～」より
LE【ラン・ベル】

《時間軸…??》

「グウルルルオオオオウ！」

鬱蒼うつそうと生い茂る藪やぶと藪の間に身を潜め、気配を隠していると不意に、私——ラン・ベルの相棒であり家族でもある獵虎イェルクロボロの咆哮ほうこうが聞こえた。

弱者を攻め立てる魔力の籠こもった咆哮は、風が複雑に吹くここ——《アグバナヤ疾風森》の中でもよく響く。

風の音に紛まぎれてやや乱れてはいるが、その聞こえ方から、もう数百メートルも離れていない距離から発せられたのだと分かる。

「グウオウオウ！」

そして咆哮は、こちらへと徐々に近づいてきていた。

それと同時に、あえぐような荒い呼吸音や、藪が勢いよく揺れる音、吼ほえるロボロから逃れるように硬い蹄ひづめが大地を蹴る音、隆起した樹木の根を飛び越えた時の僅かな着地音なども聞こえ始めた。息を潜めて耳を傾けていた私は、その他の様々な情報も全身で感じ取る。そしてまだ幼いながら

も種族的に捕食者であるロボロが、今回の獲物である「大風鹿馬イッペラウイス」を予定通りに追い込んでいるのだと確信した。

(よしよし、そのままコッチに来い)

草食性のモンスターであるイッペラウイスには、自分が作った獣道を通るという習性がある。

身を隠せる大きさの植物の間を縫うようにして作られる獣道には、巣穴に向かう道や、好む草の群生地まで続く道だけでなく、命を狙う捕食者から逃げる時専用の逃走経路もある。

今回はその習性を逆手さかてにとって、事前に逃走経路を割り出し、私はそこで待ち伏せしていた。予想もしていない余程のことがない限り、ここにやってくるだろう。あとは、ロボロに追い立てられたイッペラウイスを迎え撃つだけ。

獲物の習性を利用した、単純な狩獵のやり方だ。

万が一、イッペラウイスが恐怖のあまり獣道を見失った場合は、難度が高くなってしまっていただろうが、どうやら今回はそういうこともなく、獣道に沿って逃走しているようだ。

素直な獲物というのは、それだけでありがたい存在と言える。

(さて、と)

身を潜めている藪の中から獣道うしかがを窺いつつ、私は安堵あんどと共に静かに精神を集中しようとする。しかしまだ一〇歳になったばかりの私は、この状況に気が逸はなるのを抑えられず、真新しい自作の

弓矢を握る手に、自然と力が入ってしまう。

緊張からか、手足や顔には汗が滲み出ている、呼吸もやや荒く早いことに気がつく。それに眼球が勝手にキョロキョロと動き、忙しく周囲を見回している。

とてもではないが、集中しているとは言い難い状態だ。

これでは、矢を射たところで狙いを外すに違いない。今まで何千何万と射た経験からそれが分かった。

「ふうー、はあー」

不調を認識した私は、丁度森を吹き抜けた風に合わせ、一旦構えを解いて大きく胸を広げるように深呼吸。

大きな吸気によって肺腑に満ちた《アグバナヤ疾風森》の清涼な空気が、身体に活力を与えてくれる。

空気に混じる自然魔力の恩恵もあるのか、やや霞んでいた視界がハッキリとした気さえした。

そして古くなった空気を吐き出す呼吸と共に、肩や手に入っていた無駄な力が抜けていくような感覚もあつた。

無駄な力が抜けたことで心身の調子は安定し始め、先ほどよりもグツと良くなってきた。

そのまま深呼吸を繰り返すこと、三度。

全体的にほどよく緊張が取れた後、一度眼にギュツと力を込め、改めてイッペラウイスがやって来る方向を見つめる。

その際、殺意や焦燥感などは極力抱かないようにする。

狩りとは無心で行うことができ初めて一人前、私の師匠はそう言っていた。

何故なら、気配が漏れて獲物に気がつかれると、直前で逃げられたり、反撃されたりする可能性が高くなるからだ。

逃げられれば狩りに費やした労力や時間や費用などは全く無意味なモノになってしまうし、反撃されれば死ぬこともあり得る。

私もその通りだと思うので、極力この教えを守ろうと心掛けてきた。

気づかれる前に射殺す。反撃される前に射殺す。それが私達の狩りである。

その為には、私という存在を見つけれないようにならなければならない。

(この好機、必ずモノにしてみせる)

それに今回は、師匠から初めて許可された独猟——自身と獵獣一匹だけで行う狩りのこと。同時に、これを成功させることでようやく成人として認められる儀式——でもある。

私達イル・イーラの民にとって、初めての独猟はとても大きな意味を持つ。

それぞれの師匠から認められれば行うことができる独猟は、たとえ失敗しても、何度でも再挑戦

が可能だ。

しかし一度で達成した者と、二度三度と受けてやっと達成した者の間には、大きな隔^{へだ}たりが出来てしまう筈^{はず}がある。

(失敗はできない。でもここで焦^{あせ}るのは厳禁。焦れば全てが狂い出す)

師匠や仲間と離れ、猟獣と共に獲物を探す独^{ひと}猟に一度で成功した者は、村において上位の階級にまで昇ることができる。実力次第だが、下位の階級の親の下で育った者でも、族長にすら成ることも可能だ。

しかし逆に、最初の独^{ひと}猟に失敗した者は、その後どれほど功績を積んでもせいぜい中位の階級までしか昇れなくなる。族長や狩猟長といった上位階級の親の下で育った者でも、中位階級止まり。年を経て強くなったとしても、それは変わらない。

だからより良い地位につく為には、まずこの独^{ひと}猟を成功させることが最低限必要だった。

(母さん、見守っていて。ロラ、お姉ちゃんはヤルから)

私はできるだけ早く高い地位まで昇る必要があり、そうしなければならぬ理由がある。

それは病弱な母と、まだ幼い妹を守る為。大きく強かった父がとあるモンスター^{モンスター}の群れとの戦闘で戦死した結果、今は厳しい生活を送る家族の為に、足掻^{あが}くしかないのだ。

将来の為に、ここで失敗することは許されない。

そういった事情もあり、どうしても気が急^せぐものの、師匠の『焦^{あせ}った時こそ自然となれ』という言葉^{ことば}を思い出す。

正直意味はよく理解できていないけど、取りあえず普段の師匠の行動を見習うことにしよう。

「……ふう、はあー。ふう、はあー」

深呼吸の後、短く息を吸い、長く息を吐く。腹筋に力を込め、内臓の動きを意識する。

そして体内で魔力を練り、全身を高速で循環させる。この時、少しも体外に漏れないように皮膚の真下で引き締め留める想像をする。

すると肉体には普段以上に力が漲^{みなぎ}り、五感はより鋭敏になる。

この名称は忘れてしまったけれど、ちょっと特殊な技術だそうだ。

こういう時は、肉体強化系の【戦^{アーツ}技】を使うのが一般的らしいけど、イッペラウイスのような臆病なモンスターはそれを感じする場合がある。

しかしこれなら見^{けん}つかり難^{がた}い、と師匠はよく言っていた。

「よし」

ともかく、状態は整った。

強靱^{きうき}でよくしなる「風鈴竹^{ふうりんたけ}」と「ガンブラズウッド」、師匠が一人前の証としてくれた「緑風竜^{ろくふうりゆう}」の心筋で編まれた弦、その他各所をモンスター素材や魔法金属で補強した合成弓【バル

バルドの風弓】。

師匠と共に作ったこの自作の愛弓に、特製のクロナドム鋼製の鋭く黒い鍔が取り付けられた矢を背中の矢筒から抜いて番え、ゆつくりと引き絞る。

ギリギリと軋むような音が耳元で聞こえる。両腕だけでなく全身に力を漲らせ、力が抜けないように呼吸する。

(あ……来た)

すると、自身の中だけでなく、周囲にまで満遍なく意識が通うような状態になり始める。最近、極度に集中した時に起こるようになった現象だ。

それはまるで、自分という個が自然と一体化するような、不思議な感覚だった。

考えるよりも先に理解する。

眼で味わい、舌で感じ、肌で聞き、耳で嗅ぎ、鼻で見るような、全身の感覚全てで周囲を認識していくような、表現し難い世界との一体化。

追いつける獵虎ロボロと逃げるイッペラウイスまでの正確な距離だけでなく、藪や木陰に潜む小動物や虫の気配といった僅かな生命の息吹すらも。木々や地面の隆起だけでなく、目には見えない風の流れすらも分かるようになってきた。

《アグバナヤ疾風森》は複雑に吹く風が特徴的な森である。

思いがけず吹く風は、私達の匂いを獲物に運んでしまうこともあれば、放った矢をどこかに逸らしてしまうこともある。

反対に、匂いを遮ってくれたり、矢を速くしてくれたりなど助けとなる場合もあるが、意図して活用するには熟練の技と経験が必要だ。

だからいつもは、風が助けとなるか障害となるか、それはその時にならないと分からない。

風の気紛れで泣くことも笑うことも、ここに住む私達にとっては日常の出来事だった。

(まだ薄らとしか見えないけど……これなら)

普段なら難しいかもしれない。

けど今の状態なら、という思いが生まれた。

まだ薄らとしか見えない風の流れは複雑に入り組み、まるで生き物のように刻一刻と変化する。その全てを見抜くのは難しい。というよりも、不可能である。

どんな暴風の中でも百発百中で狙った獲物を射抜ける師匠は、普段からその風を見ることができると言っていたので、私も同じく意識しなくても見られるように精進しないといけない。

そう思っていると、認識が次第にぼやけ始めてしまった。

(つと、集中集中)

集中しないといけないのに、これではいけない。

こうなると無駄な思考は邪魔になる。

私は何も考えず、ただそれが自然であるかのように待った。

姿勢は不動。まるで石のように動かず、弓矢を引き絞ったまま、イッペラウイスが来るであろう獣道に集中する。

既に距離は僅かしかなく、その時はすぐにやってきた。

「——ッ」

背の高い「ブージャ草」の隙間に造られた、敵対者から身を隠すのに適した獣道。

そこを駆け抜けようとしたイッペラウイスを視認するよりも早く、私は矢を解き放つ。

距離としてはまだ四〇メートル以上あるだろうか。しかもその間には木々や藪、吹き抜ける風が障害となる。もう少し近づきたかったけど、これがこちらを察知されてしまわない、限界ギリギリの距離だった。

普段の私なら、この状況で狙い通りに射抜けるのは十射中四射くらいだろうか。

しかし放たれた矢は、ただそうなるのが当然とでもいうかのように、木々や複雑に入り組む風と風の隙間を縫いながら直進。まさに斜め前方からイッペラウイスが現れた瞬間に、その胸へと吸い込まれていった。

クロナドム鋼製の硬い鎌が強靱な皮を穿ち、筋肉の鎧を貫き、硬い骨の隙間を抜け、力強く拍動

する心臓を射貫く確かな手応え。

「ブイフイフイイルルルッ！」

雄鹿のような長く大きな角を持ち、首を長い鬣で覆われた馬と表現できる姿のイッペラウイスは、矢の衝撃に走る勢いを落とし、しかし倒れることなく走り続ける。

天敵に追われ、必死に逃げていたところに決まった致命傷。

心臓を射抜かれ余命僅かな状態でありながら、その双眸に宿るのは、自身を殺す者に対する激情だった。

それは、怒りか憎しみか、あるいは恐怖か悲嘆か。どれが正しいのかは分からないけれど、胸に矢が突き刺さったまま走るイッペラウイスは私を見ている。

その澄んだ双眸が私を見つめ、私もそれを見つめている。

視線が絡んだのはごく一瞬のことだっただろう。

身体に残された力の全てを振り絞るように、イッペラウイスは私に向かって突進してくる。それは逃走ではなく闘争の為の疾走だ。

どこにそんな力が残っていたのか、グンッ、とその体躯が加速した。

邪魔な藪は大きな角で薙ぎ倒され、あるいは蹄に踏みつけられていく。イッペラウイスは最短距離を迷わず走って来る。

(ふう……はあ……)

イッペラウイスの大きな角で突き上げられれば、私は死ぬ。そうでなくとも体当たり一つで重傷は免れない。体格差が大き過ぎて、受け止めることなどできるはずもない。

また角に纏わりつく薄い風のベールは、矢の軌道を逸らす盾となる。先ほどの一矢は意識外からの攻撃だった為にさほど妨害されなかったが、今回は違う。真正面から射ても、狙いは外されるだろう。

突進の速度的に、数秒も猶予はない。左右に回避しようにも藪などで動きを制限され、上に逃げようにも間に合わない。

迫る死への緊張からか、ピリピリと皮膚が震え、身体は自然と反応する。

逃げるのではなく、イッペラウイスという獲物を迎え撃つ為に。

外せば死ぬが、それもまた狩りだった。

命を狩る者は、同時に狩られることも覚悟しなければならぬ。

それは誰であろう、師匠の言葉だった。

(……………)

考えるよりも先に身体が動いていた。

一切の遅滞なく背中の中矢筒に入れられていた矢を抜き、【バルバルドの風弓】に番えて限界まで

引き絞り、即座に射る。

特に狙いはつけなかった。ただ、ソコだ、と思つた瞬間に矢を放つただけだった。

そして矢とイッペラウイスの距離は、一瞬にも満たない瞬間に埋め尽くされる。

まず、矢がイッペラウイスの角が纏う風のベールの影響を受け、軌道を僅かに逸らされた。

それは体表を削りながらも横を抜けていく軌道だった。致命傷には成りえない。普通なら、私は数秒後に轢殺されていただろう。

しかしビュゴツ、と《アグバナヤ疾風森》を巡る気紛れな風が突如吹いた。

逸れるはずだった矢の軌道はまた僅かにズレて、僅かな抵抗を試みたイッペラウイスの心臓を射抜くこととなる。

他の軌道だったならまず間違いなく外れていた。風のベールに逸らされ、《アグバナヤ疾風森》の風が吹いたことで出来上がった、ただ一つの道。

それを、考えるよりも先に感じた、のだろうか。

私自身、目の前の結果が信じられなかった。

「……ッ」

ともあれ、流石に心臓を二本の矢に射抜かれれば、生命力の強いイッペラウイスとてどうすることもできないのだろうか。

走る速度が目に見えて落ちたかと思えば、足をもつれさせ、地表にまで隆起した木の根に引っかかる。駆けていた勢いのままに、イッペラウイスの体軀は跳ね飛んでから転倒し、身体を擦りながら転がって来る。

ズザザ、と音を立てて数メートルほども転がり、私のすぐ傍で停止した。

地面に倒れたイッペラウイスの、弱々しく虚ろな眼が私を見上げる。

それを認識して、背中には冷や汗が滲み出た。

「ふう……よしッ」

生命力の強いモンスター的一种であるイッペラウイスは、今のように心臓を射抜いても、しばらくは生きている場合が多い。

仕留めたと油断すれば、その大きな角で突き上げられたり、強烈な後ろ足での蹴りを受けたりしてこちらが絶命することも有り得る。頭の良い個体になると、瀕死を装ってこちらを誘い、猛烈な反抗をしてくることもある。

実際、以前師匠と共に参加した群獵——大人と子供が一緒に狩りに向かう、訓練の一つ——で、油断して近づいた子供が襲われた。

近くに居た親が庇ったので子供は死ななかったが、親はイッペラウイスの角で突き殺されてしまった。

今でも、その子の悲痛な泣き声が耳に残っている。

だから最後まで油断はしない。というよりも、できない。

「今案にしてやるからな」

油断はしないが、このイッペラウイスにはもう立ち上がる体力も残っていないらしい。身体を起こすこともできず、小さく短い呼吸を繰り返している。

しかしそれでも、手足を弱々しくバタつかせることを止めていない。

まるで走って逃げるような動作だった。最後まで生き残ろうとする生命の尊さがそこにある。

だから狩りは最後まで油断してはダメだ。師匠も同じことを何度も言っている。

そして獲物を無駄に長く苦しめてもダメだ、とも言っていた。

私はそれに従い、トドメとなる三本目の矢を射た。それは狙い違わず眉間を射貫き、イッペラウイスの生命を確実に終わらせた。

「キユウ……ウ」

初めての独獵の獲物となった、一頭のイッペラウイスは死んだ。

経験値を得た特殊な感覚が全身に走ったことからそれもそれは間違いないと確信しているが、それでも警戒しながらゆっくりと近づいて、本当に死んでいることを確認する。

そこでようやくやくホツ、と息が漏れた。

狩りは、狙う方も、狙われた方も、命を落とす可能性が消えることはない。どちらにとっても命がけだ。

だから狩りが終わったこの瞬間に、少し気が抜けたのだろうか。自分自身情けないと思いつつも、それによってようやく現状を認識することができた。

どうやら、緊張のせいで知らず知らずのうちに普段以上に力を使ってしまったらしい。全身に張り巡らせていた魔力も、無駄に多過ぎる。

達成感と疲労感が一度に押し寄せてくる。

普段以上に重い身体を引きずりつつ、それでも拳を握り、私は思わず空に向かって突き上げていた。

「取りあえず、これで初めての独猟、成功ねッ！」

私達イル・イーラの民は、男は外で猟を、女は家で家事をするのが一般的だ。

数がそれほど多くない私達にとつて、生活を維持していくには役割を分担した方がいいのだから、それも仕方ないことだとは思う。

しかし私の家族は父を五年前に失い、母は病弱で妹はまだ幼い。

村の皆が多少は助けられるものの、男がいないと生活は苦しくなりやすい。

それを何とかする為に、私はまず父の弓矢を手を取った。父の代わりに狩りをすれば、生活が少

しは良くなると思っただからだ。

体調を崩しがちな母には栄養たっぷりの肉が必要だ。妹を大きくするのも肉が必要だ。

肉は狩りをする者に優先的に回されるのだから、私が弓矢を手にして男達と共に戦うのは当然の選択だった。

それに寒さをしのぐ毛皮や、細工することで外貨を得られる牙や爪などの材料の確保も重要である。

ただ、辛いことは多かった。女の身で狩猟に勤しむ私は、何かにつけて同年代や少し年上の男共から色々と言われてきた。

『女の癖に』『婿むすめを見つけて家事をしろ』『股を開けばすぐに見つかるとぞ』などなど。他にももっと酷く、屈辱的な言葉もかけられた。

彼らが、自分を容易に超えてしまう私の才能を恐れたからこそそう言っていたのだとは、後から分かったが、それでも傷ついた。

あまりにも心ない者は、父の親友だった師匠が蹴散けちらしてくれたから、そこまで気にせず暮らしてこられたけれど、そうでなかったらもう少し何か違っていただかもしれない。

しかしそんな侮蔑あざわらとも、今日でお別れだ。

「はー、良かった。これで師匠とも堂々と顔を合わせられる」

私の眼下には、息絶えたイッペラウイスが転がっている。

大きさからして間違いなく成獣だ。更に角の大きさからもそれなりの歳を経た個体だと推測できるものの、経験の浅い私では正確な年齢の断定は難しい。

しかし、幼獣ではないことだけは確かなので、胸を張って自慢してもいい成果であった。

成果を出した今、私を侮る者は滅るだろう。少なくとも、まだ独猟を済ませていない者は何も言えなくなる。そんなことをすれば最悪、族長達による裁きの対象にすら成りえるのだから。

「さて、早速解体しないかねー」

何はともあれ、狩猟の後はず解体である。

悠長に時間を使うと、流れた血に誘われて他のモンスターがやって来る。

《アグバナヤ疾風森》には、群れでイッペラウイスを狩る肉食性の「突風狼」や、暴風を操りこの森の生態系の頂点に君臨する「嵐虎」をはじめ、凶暴な肉食獣が多数生息している。のんびりしていると、獲物を横取りされるどころか私まで襲われかねない。

そういった生態系の上位種は、個体数がさほど多くないことが救いだけど、手早く終わらせた方が無難である。悠長に時間を浪費して危険を呼び込むなど、今の私にはまだ早い。

「えーと、こうやって、こうしてと……あ、ロボロも来たか」

手頃な木の枝に「首吊り藪」を編んで作った手製の縄を引っ掛け、片方の端にイッペラウイスの

足を繋ぐ。そしてもう片方をグイッと引っ張り、逆さに吊り上げる。

血抜きしていないイッペラウイスは重いけど、私は【狩人】とその上位職【野伏】や【射手】といった複数の【職業】を持ち、年齢の割にはレベルを上げている。

それに師匠が狩った「突撃熊」や「ネルメアの青銅獅子」を、同じように逆さ吊りにしてきた経験があるので、短時間で終わらせることができる作業だ。

吊り上げた後は喉元を切り、血抜きを行う。体内に残っていた血がドブドブと勢いよく流れ出し、濃い血の匂いが鼻をつく。

慣れたその匂いを嗅ぎながら、傷口に蓄の状態の「血吸り花」を刺しておくことも忘れない。

「血吸り花」は生物の血を吸って成長する魔法の一種で、これを傷口に刺しておけば効率良く血を抜くことができ、しかも血の匂いも抑制できる。

この花は、鮮度が良く、また強いモンスターの血を吸るほど、鮮やかな色合いで開花する。

綺麗に咲けば、各地を渡り歩く【行商人】達に高値で売れるので、狩りの獲物の血抜きでよく使われる。

イッペラウイス程度のモンスターの血では、そこまで高く売れる色にはならないけど、小遣い稼ぎにはなる。

そうして、血抜きが完了するまで次の作業に移るのを待っていたところ、藪を揺らしながら獵虎



ロボロがやって来た。

「ガル。ウオフ」

一仕事終えた、ご褒美頂戴。

まるでそう言っているかのように鳴いたロボロは、私の近くで伏せ、尻尾をパタパタと振っている。

「大変な追獵役、ご苦労さま」

ロボロの大きな頭を撫でながら、私は思わず苦笑いした。

狩獵の時の、牙を剥き出しにして獲物に襲いかかる勇ましい姿は、既がない。

ここに居るのは、飼いなされた猫のような仕草で嬉しそうに撫でられる、白くモコモコとした柔らかい体毛に覆われた愛玩動物だった。

狩りでは頼れる相手だけど、普段は可愛い、もう一人の妹のような存在であるロボロを愛しく思いながら、その背中や首を優しく掻いてやる。

ロボロも嬉しそうに身を寄せ、尻尾を更に勢いよく振った。

その様子には、初めて私のところに来た頃の——弱々しく、自分以外は全員敵だと思っていた頃の面影は一つもなかった。

「まったく、大きくなっても甘えん坊だなあ、ロボロは」

ロボロは、大気を操り、激しい嵐を巻き起こす「嵐虎」の幼獣である。ストームタイガーは個体数が少なく、家族の愛情が深いことで有名で、子育て中に縄張りに入れば命はないとまで言われ恐れられている、《アグバナヤ疾風森》の王者だ。

本来は、子が生まれるまでは番が一緒に暮らし、子が生まれると母虎と子虎だけで生活する。しかし、ロボロは母虎から産まれて間もなく捨てられてしまったらしい。

ロボロの体毛は白く、赤い瞳をしている。ロボロは、とても珍しい白化個体なのである。

アルビノは普通の個体よりも弱かったり病弱だったり、色々問題が多い。たとえばストームタイガーの子といえども、厳しい自然の中では生きていくのは難しい。

本能でそのことを悟ったためか、あるいは明らかに見た目が違うことが原因となったのか。

理由はともかく、ロボロは捨てられた。そのままだったなら、数日と生きることにはなかったと思う。

でも、師匠が鳴いていたロボロを見つけて保護し、私に育てよう言いつけた。

私も師匠の命令だからと引き受けたけど、最初は本当に大変だった。

警戒心が剥き出しで、触ろうとすれば手を噛んでくるし、餌をやるうとすれば引っこ掻いてくる。しばらくの間は生傷が絶えなくて、嫌になることも多かった。

何より、与えるものを食べようとしなかったことを思い出すと、今でも腹が立つ。貴重なご飯を

分けていたのに、と。

ただ、苦勞はしたけど、それだけに仲は深まった。

小さい頃から一緒に育ったからか、育てたからか。何だか相棒でもあり、私の子供であるような気さえする。今のようじゃれついでくる時など、特にそうだ。ずっとこの白い身体を撫でていたと思う。

でも、守られるしかなかった時代は既に過ぎていく。

「私と一緒に、強くなるうな」

まだ幼いので風を操る能力は弱いけど、私と一緒に鍛えたことでロボロは力をつけ、最近では普通の個体とも大差ないのではないか、というレベルにまで至っていた。

私が今回の独獵の成功で成人と認められるように、ロボロももう少しで成獣となるだろう。その頃にはきつと、アルビノというハンデよりも、私との狩りでの成長の方が大きくなっているはずだ。まだまだ長い付き合いになるだろうロボロを、私は優しく撫でていく。

「血抜きが終わるまで、ちょっと待とうな。うりゃうりゃ」
すると、ロボロがより強くじやれついできた。

調子に乗らせるか、とばかりにその脇や腹を擦っていく。ロボロは身を振るものの、それは私にとつて織り込み済みの動きで、逃げた先には私の指がある。

ロボロは抜け出せない擦りの嵐に、ピクピクと痙攣けいれんするように震える。そうしている間に、気がつけば、イッペラウイスの傷口に差した“血啜り花”は満開になっていた。

その色は鮮やかな朱色。ただし末端の方は若干薄く、悪くはないけど良くもない色合いだ。思っていたよりも安くなるかも。そう思いながら“血啜り花”を傷口から引き抜き、腰につけたポーチ型収納系マジックアイテムの中に入れておく。

容量は小さいけど、こうした小物を入れておくには便利な品で、父の形見でもあるので大事に使っていた。

「血抜き完了、つてことで、今美味おいしい内臓を切り分けてやるからなー」
 “血啜り花”が咲いた。それはつまり血抜きが終わったということだ。

私はまず、イッペラウイスの肛門に“スライム布”を詰めてから、師匠から贈られた切れ味抜群の解体ナイフを取り出し、毛皮を剥いでいく。

毛皮も売り物になるので、極力傷つけないように気をつけながら、素早く丁寧に行った。

先に肛門に“スライム布”を詰めたおかげで、内容物が漏れて周囲が汚れることもなく、そこそこの値段で売れそうな毛皮が採れた。

心臓と眉間の部分に矢を受けた孔あなが開いているけど、これくらいなら殆ど問題にならないだろう。

毛皮を剥ぎ終えたら、次は内臓が無駄に傷つかないように、丁寧かつ迅速に掻き出していく。

その際には、肝臓や心臓など美味しい部位よりも先に、下手な処理をすると全てが台無しになる膀胱ぼうこうや直腸などを優先する。ここを失敗すると肉が臭くなり、喰えなくなる場合もある。

食べられなくなったからといって独猟が失敗扱いになることはないけれど、最初の独猟の成果は、まず家族と師匠に振る舞うのが風習となっている。

下手なモノは食べさせられない。解体する手には自然と力が入っていた。臭い尿が溜まっていた大きな膀胱など全てを切り取り終えると、ホッと息が漏れる。

取りあえず、これで安心していい状態になった。

その後は、心臓や肝臓など内臓の中でも使い勝手のいい部位を、背囊型収納系マジックアイテムに入れていく。

これは師匠がくれたお下がりがりながら、その収納容量はイッペラウイス数体分でも余裕があるほどだ。

こんな高価な品を惜しげもなくくれる師匠には、本当に感謝してもしきれない。

「ほら、先に食べてな」

私が解体している傍らで、ロボロは目の前に積み上げられていく美味しそうな内臓をジッと見ていた。

だから褒美として、私は肺と腎臓、それから足の一本をロボロにあげる。

本当なら腎臓はしばらく流水に浸した方がいい。でもロボロは生で食べるのが好きだ。美味しそうに噛みつき、咀嚼そじやくしている。

帰ったら焼いた肉を欲しがるだろうけど、新鮮な時でないと思えば、食べられない内臓の味が好きなロボロは、嬉しそうに尻尾を振っていた。

それに思わず笑みを零しながら、残った肉を各部位ごとに切り分け、こちらも背囊型収納系マジックアイテムに入れていく。

そうこうして、解体作業を始めてからしばらく経った頃。

風の向きが変わったかと思えば、口の周りを血で赤く染めたロボロが立ち上がり、ある一方を睨み付けながら小さく唸り出した。

「グルウウウウウ」

明確な威嚇音。押し殺すような低い声。

大地にへばりつくように身を伏せ、鋭利な牙が覗く。

私はもう少しで終わりそうだった解体の手を一旦止めて、右手に解体ナイフを逆手に持ち、左手には後ろ腰に備えた鞘から抜いた山刀ヤマタチを持って構えた。

本当は弓を使いたいけど、弓は近すぎると咄嗟とつさに反応できないかもしれない。

一瞬が生死を分ける今は、これでいい。

「何が来た？」

脅威が近づいてきている。それは鳥肌が立ったことと、背筋に悪寒が走ったことで明白だった。

脅威の正体がなんなのか、知る必要があった。

「ウオフ、ヴォン」

ロボロの声と、尻尾や前足の規則的な動き。

それで何がこちらに向かって来ているのかが分かった。

「ググバナヤ・バグベア」が二体か……ハハ、大量だ。やっばいね」

「偽熊鬼ウソクマノミ、と呼ばれるモンスターが存在する。

一応「小鬼ゴウシ」系の上位種に分類されるが、同じ上位種である「中鬼ナカゴウシ」とは比較にならない強さで、更に上の「大鬼オウゴ」と同等くらいだろうか。

背丈は平均的なホブゴブリンよりも高く、発達した二本の長い腕を持つ。そして全身は天然の防具である茶色い体毛に覆われている為、一見すると大型の猿系モンスターか小型の熊系モンスターにも思えるだろう。

「たまたま巡回中で、血の匂いにつられた、かな？」

バグベアの毛皮は天然の防具である。

半端な矢では貫けず、斬撃は勢いを殺されてその下の肉まで断てない。打撃も、ぶ厚い皮下脂肪で受け止められる。

また全身筋肉質で、見かけよりも遙かに力がある。太く長い五指で掴まれば、私の骨はもちろん、イツペラウイスの太い骨でも破壊されるだろう。

それでいて棍棒などの扱いが単純な武器や道具を手で扱うことが可能で、木を貫くほど鋭い爪もある。

「気配の隠し方からして、もしかして精鋭か、メイジでも混ざってる？」
そして最も注意しなければならないのは、人の頭を丸呑みにできそうなほど大きな口による噛みつきだ。

バグベアの性格は残忍だ。ゴブリンやオークのようにヒトを強姦して繁殖する習性はないけど、獲物を生きのまま食べる。それを可能にする口は、まさに脅威であった。

肉体面に秀でた分、ホブゴブリンなどより知能が遥かに低いことは救いかもしれないけれど、それだけに上位者の命令で命すら投げ出して特攻を仕掛けてくる危険性もある。

本当に厄介なモンスターだ。

「もう少しなのに、面倒なのが来たね、ロボロ」

そんなバグベアの中でも、ここ《アグバナヤ疾風森》に生息するアグバナヤ・バグベアは全体的

に能力が高く、特に機動力と知能に優れている。

《アグバナヤ疾風森》のモンスターの大半は機動力に優れ、気配察知能力が高い。それを狩るには相応の速さと気配を隠す能力が必要であり、アグバナヤ・バグベアは代を積み重ねる中で、その力を伸ばしてきた訳だ。

また効率的に狩りをする為か考える力もある。

天然の槍となる「風銅樹」の枝を持ち、長い手足を用いて樹木を飛び回り、立体的な包囲網を形成して獲物を追い込む。襲う際は必ず単独ではなく複数同時に、獲物の死角から攻撃する。

連携してくるアグバナヤ・バグベアの群れの前には、時として、単体ではより強者であるモンスターも倒れてしまう。

「残りは少し勿体ないけど、置いていくか」

また師匠曰く、《アグバナヤ疾風森》の深部にはアグバナヤ・バグベアを率いる【帝王種】が統べる巨大集落があるらしい。そのせいで鍛えられたエリートが時折混ざるそうなので、気をつける必要がある。

一度師匠が引き連れてきたエリートと戦ったことがあるけど、通常種と比べて三倍は強かったように思う。

それは身体能力だけでなく、戦術や知能まで更に高度だからだ。その時は一対一だったので勝て

たにせよ、相手の数が多い状況なら、逆に私が狩られていたに違いない。

「よし」

そして運が悪いことに、今迫ってくる敵の中には、そのエリートが居る可能性が非常に高かった。普通のアグバナヤ・バグベアなら、隠れていてももう少し気配が分かりやすいので、まず間違いない。

知能が高いメイジ種でも同じことが言えるけど、遠距離攻撃が可能なメイジ種の方がどちらかといえば厄介なので、まだエリートの方が個人的には嬉しい。

「さっさと逃げよう」

近づいてくるアグバナヤ・バグベアの集団を前に、私の判断は早かった。

抜いた解体ナイフと山刀を鞘に収め、近くに置いていた【バルバルドの風弓】を手に取り走り出す。

既にイッペラウイスの角や毛皮や肉など、必要な部位の切り分けは終わっている。残りは諦めるしかないけど、命をかけるほどの量ではない。

ならここは戦略的撤退を選ぶべき場面だ。

幸いにして、まだ私達が風下だ。いつ風向きが変わるかは分からないけど、今なら動いても悟られにくい。

できるだけ距離を稼がねば。

そう思いながら、極力音が出ないように駆け抜ける。

「……あ、気づかれた」

しかし、走り始めてしばらくすると、風の流れが変わってしまった。稼げた距離は百数十メートルほどだろうか。

途端、アグバナヤ・バグベア達の動きに変化があった。

一二体のうち、二体は吊り下がったままのイッペラウイスの残りを回収し、残り一〇体は私を追うらしい。

「イヤッコココココ！」

特徴的な鳴き声が聞こえる。鳴いているのが恐らくエリートだ。その意味は『追え、狩れ』。独特な発声によつてそれは良く響き、風が吹いても聞くことができる。

鳴き声に反応した九体の気配が、私に迫る。枝から枝へ移動する者も居れば、地上を駆ける者も居る。

「ヴォフ」

「分かってるよ、ロボロ」

私達イル・イーラの村まではまだ遠い。

体力と速度には自信があるけど、そこまで辿り着く前に、絶対に追いつかれてしまう。生きるか死ぬか。

私の長くて短い追跡戦が始まった。



空に輝いていた太陽は沈み、星空が広がる夜。

それはモンスター達が活発に動き出す闇の世界。

夜闇を見通す目を持つ私達イル・イーラの民であっても、夜こそ本領を発揮するモンスター達の前では下手に姿を現さない。そんな魔の時間帯だ。

本来ならば、私も隠れていたかった。

でも、現状ではそんなことは許されやしなかった。

「ケルウコカカカカ！」

「ツの！」

死角から飛びかかってくる一体のアグバナヤ・バグベア。

風銅樹^{ウイスクラド}の枝槍を捨てた長い手が私を捕まえようと伸び、大きく開かれた口からは汚らしい唾液

でテラテラと濡れた牙が覗く。

首筋を狙った噛みつき攻撃に対し、私はその口の奥深くにまで矢を撃ち込んだ。

至近距離で放たれた矢は狙い違わずアグバナヤ・バグベアの口内に侵入。血に濡れた鉄が頸椎^{けいつい}を貫き、突き抜ける。

確かに致命傷を負わせた手応えがあった。

「しっ、こい！」

しかし生命力に優れたアグバナヤ・バグベアは、それだけでは死なないらしい。

口から矢羽根が覗いたまま、最後の足掻きとばかりに身体ごと突っ込んでくる。

咄嗟に身体を捻りながら射た為、回避するには十分な距離もなく、また体勢も悪い。闇が広がっているせいで視界が悪く、反応が遅れたことが全ての原因だった。

これで死ぬことはないとしても、地面に押し倒されれば後続に殺されるだけ。

「ガオオオン！」

逃走を開始してから何度もあった死の予感。

しかしその度に、ロボロが助けてくれた。それは今回もそうだった。

自身の血か、あるいは敵の血か。

それすら判然としないほど白い体毛を赤く染め上げたロボロが横合いから突進し、アグバナヤ・

バグベアの身体を殴り飛ばす。

前脚の一撃はアグバナヤ・バグベアの頸部に叩きこまれ、グルリと首を一回転させる。

元々矢で射抜かれたことで脆くなっていた頸椎からは粉碎音が響き、アグバナヤ・バグベアの身体から力が抜けて地面に転がった。

「ありがとうロボロ！ これで残り二体……何とかなる、かな？」

声をかけながら、再び逃走を開始する。

エリートを含めた一〇体から追跡され、一体どれほどの時間が過ぎただろうか。

イッペラウイスを狩ったのが昼をやや過ぎた頃で、今は夜。その間、ずっと走り続けてきた私とロボロの体力は限界に近かった。

動き続けた両脚が悲鳴を上げている。全身の筋肉も酷使し過ぎて、荒れる呼吸で意識が乱れる。

それに、身体中に大小様々な傷が出来ていた。傷口から流れ出る血はかなりの量だが、手持ちの【体力回復薬】は既に品切れ。

血を失い過ぎたからか、全身から冷や汗が吹き出している。視界が悪いのは、夜のせいだけではない。

まさに満身創痍だった。

ふと背後を見れば、零れ落ちる赤い命が、私が走ってきた跡を示していた。

「あー、本当に、死ぬかも」

辛いなことに致命傷こそないけれど、全身を鈍い痛みが苛む。

「村まで、持つ、かなあ？」

身体の問題だけではない。八体のアグバナヤ・バグベアを狩ったことで矢は残り僅かしかなく、

また戦闘中に山刀など幾つかの装備が失われた。

消耗の激しい私に対して、敵の中にはエリートが残っているし、矢を射たので多少は傷を負っているにせよまだ余力を残しているはず。

仲間の殆どが死んだのだから逃げ帰ってほしいところだが、ここまで来ると向こうも引くに引けないのだから。

やりすぎた。そうは思うけど、そうするしかなかったのだ。今さらどうしようもない現状が憎らしい。

ただ不幸中の幸いか、今はこれ以上の損害を避け、出血で私達が弱のを待つ方針にしたらしく、闇夜に紛れて付かず離れずの距離を保っている。

もちろんただ追ってきている訳ではない。時折闇の中から拳大の石が飛んでくることもあれば、追い立てるような咆哮が周囲から聞こえてくることもある。

それに先ほどのように直接襲いかかって来ることもあるので、油断はできない。

精神的に休まる時はないけれど、激しい戦闘がないことで体力の消耗を少しでも抑えられるのはありがたかった。

「ロボロ、これ食べな」

走りながら、イッペラウイスの小さな生肉を取り出して、並走するロボロの口元に差し出した。本当なら後でゆつくりと食べたいところだけれど、今は少しでも迅速に栄養を摂取しておいた方がいい。

グギルルル、と私のお腹も小さく鳴いた。

ただでさえ大量の血を流し、肉を削そがれてしまっているのだ。激しい運動で疲弊した身体が栄養を求めているのが分かる。

まだ幼く、どうしても大人より体力の少ない今の私にとって、持久戦は不利になる。

「あ、いいの見つけた」

ロボロは生肉を数回噛んだだけで呑み込んだ。それだけでは消化の負担が大きそうだったので、進行方向に自生していた「疾風イチゴ」や「修練ニンニク」などをすれ違いざまに千切って、一緒に食べさせた。

その後、私もそれらを纏めて口に放り込む。

「うーん、「疾風イチゴ」は甘くて美味しいけど、「修練ニンニク」の味が強すぎるなあ」

そんなに数はとれなかったけれど、天然の甘味である「疾風イチゴ」なら食べやすいし、何より一定時間行動速度を高めてくれる効果がある。逃走時には最適な魔法薬草の一種と言えた。

本当は数種類の魔法薬草と一緒に調合した方が、効果が強く長持ちする魔法薬が作れるけれど、今は贅沢を言っていられない。

また、「修練ニンニク」は希少な魔法薬草の一種で、肉体の活性化や疲労回復、消耗した魔力の補充など、現状では最高の効果を發揮してくれる。

身体の奥底に溜まった疲労が取れる気配はないけれど、走りながらも表面上の疲れは薄れてきているような感覚があった。

苦しい時ほど美味いモノを喰え。師匠の言葉はやはり正しい。

「最後まで頑張ろうね」

「ウオフ」

お互いを支え合いながら、私達は走った。

走って走って、時には使えそうな物を拾い集めながら走って——村に辿り着く前に何かがおかしいと感じ始めた。

「なんだか……変だなあ」

私達は、既に村の警戒範囲に入っている。ここまで来れば、師匠よりは劣るけど、それでも腕の

良い狩人達が助けてくれる、はずだった。

しかしその気配はなく、何かが燃えているような匂いが漂っている。

まだ小山を一つ抜ける必要があるけど、村まではもう少しのはずなのに。嫌な予感がした。それも飛び切り嫌な予感だった。

「まさか……村に何かが起きている？」

村に近づけば近づくほど、嫌な予感は明確な形を持つようになった。

夜空に浮かぶ雲が赤く光っている。その下が炎で燃えているような色合いだった。

暗い夜だけに、その明かりは一段と良く見えた。

煙が幾つも上がり、星明りがそれを照らしている。気紛れに変わる風に乗って、木々が燃える臭いが私のところまで届いた。

その中には、嗅ぎ慣れた、血肉が燃える臭いも混ざっていた。

そして甲高い悲鳴のような、あるいは猛叫びのような音も僅かに聞こえる。

臭いも音も、またすぐに風の流れが変わったことで感じられなくなってしまったけれど、その事実に私の全身を寒気が走った。

村は何者かに襲われている、と考えるべきだった。

母と妹は、無事だろうか。

それに、師匠がいる村を襲い、あそこまでの被害を出させた敵とは一体何者なのだろうか。

まだ見ぬ敵は恐るべき存在だと、何となく分かってしまった。

「ロポロ、早く村に……ッ！」

そう言った時、私の意識が村の異変に向けられたことを察してか、敵は追跡を終結させることにしたらしい。

「イヤッコココココ」

独特の奇声を上げ、後方から勢いよく同時に飛びかかってくる二体のアグバナヤ・バグベア。その手にはやはり風銅樹の枝槍が握られている。

鋭く削られた尖端で突き刺されれば、地面に縫い付けられてしまうだろう。

「エリートは、そっちー！」

左から迫るのは普通のアグバナヤ・バグベアで、右から迫るのがエリートだった。

見分け方は簡単で、まず身体の大きさからして違う。普通のアグバナヤ・バグベアよりも良いものを食べているからか、一回りも二回りも大きい。それに全身に備わる筋肉も分厚く、体毛も艶やかで綺麗だ。

そしてより良い武装をしている、豪華な装飾品を帯びている、などといった部分でも見分けるところができる。基本的には、ランクの高い装備を身に着けているほど、地位も能力も高いとされる。

目の前のエリートは、装飾品こそ首飾りくらいしかないけど、胴体を守る立派な革鎧を身に付けていた。

殺した冒険者などから剥ぎ取ったのだろうそれは、使い古され、血で汚れているのか黒いシミがある。

そうした見た目にも違いは明らかだし、また枝槍による攻撃も鋭さが違う。万全ではない今の状態では、地に足のついた連続攻撃をされたら防げないだろう技量が窺えた。

飛びかかれて接触するまで僅かの間にそこまで考え、私は左から迫る普通のアグバナヤ・バグベアに向かって自ら駆け出した。

「ハアッ！」

同時に、逃げている最中に見つけて掴んでおいた「弾けの衷」を一つ、眼前に向けて【投擲】する。

小さいけどそれなりの重量がある「弾けの衷」は勢いよくアグバナヤ・バグベアに迫り、直撃こそ右腕で防がれたものの、しっかりと爆発。右腕の体毛に僅かな焦げ跡を残しただけに終わったが、狙い通り視界を塞ぐことができた。

それに飛びかかってくる勢いも、少したけ落ちたようだ。

その一瞬を見逃さず枝槍を避けようとした時、本能によってかギリギリで動かされた先端が私の

右頬を削る。歪な尖端は荒く肉を抉り、視界の隅で血肉が飛び散った。

鈍く熱い痛み顔に顔をしかめながらアグバナヤ・バグベアの脇を通り過ぎ、すれ違いざまに無防備な首筋を解体ナイフで薙ぐ。

「ラン・ベルは戦技【首狩り】を練り出した」

ズブリ、と解体ナイフが肉に切り込む独特の感触。戦技によって強化され加速した刃先は頑丈なはずの毛皮を切り裂き、その奥へと埋没していった。

硬い皮膚や厚みのある筋肉、太い骨に強い抵抗を感じながらも力を振り絞り、結果として頸椎まで切り裂いてそのまま突き抜ける。

「ギュゴ、コココ、コ」

首の約三分の二が斬られるという致命傷を負ったアグバナヤ・バグベアは、勢いよく噴出する鮮血に濡れながらヨタヨタと歩いたかと思えば、ドツと地面に倒れた。

ピクピクと僅かに痙攣するだけで、もはや広がる血の海から起き上がる気配はない。しかし不意打ちが怖いので、完全に仕留めることを忘れない。

「せいッ」

かろうじて胴体と繋がっていた頭部を全力で蹴ると、首が完全に千切れ、その勢いのまま夜闇の中に消えていった。

そして残された胴体からはドバドバと血が溢れ続け、とても濃い血の臭いが周囲に漂う。それを間近で嗅いで、思わずペロリと舌で唇を舐めた。命を狩るのは、やっぱり心地いいものだった。

いつの日か私もこうなるのかと思うだけで、背筋がゾクリとする。

「残りは、エリートだけッ」

最後に残ったエリートは、怒りに歪む凄まじい形相で私を睨みつけていた。

必ず喰い殺してやるとでも言わんばかりのそれに、思わず頬が引きつりそうになっただけ、私は何故だか笑っていた。

ここまでの重圧感が一気に薄れたからか、あるいは何かしらが吹っ切れたのか。それは私自身にも定かではなかった。

ただ、事実として私は興奮していた。身体が深部から火照る。カラカラに喉が渇く。何かに飢えるような、そんな感覚。

頬から流れ落ちる血を指で拭い、唇に紅を塗る。そして目元にもその指を滑らせ、血化粧を施す。私達イル・イーラの民が時折施す、決死の嗜み。その一つ。

「ハハハ、何だか楽しくなってきたねえ！」

まるで身体の奥底の何かが、一つ一つ外れていくような気分だった。

状況は最悪に近い。二対二から二対一と、数の上では何とか優位な状況に持ち込めたけれど、総合的に比較すればやはり私達の方がが悪い。

ここまで配下に戦わせ、あまり手傷を追っていないエリートに対して、私達は限界が見え始めている。

先ほどの戦技の一撃も何とか絞り出したようなもので、私の意識は朦朧とし始めている。それに私を囮にしてエリートを背後から奇襲するはずだったロボロも、結局ずっと様子を窺ったまま動けなかった。

気配を隠しきれず、存在を悟られて警戒されてしまうくらい、ロボロだって限界なのだ。

生来のプライドからそれを窺わせないようにやせ我慢しているだけであり、普段のロボロなら決して見られないほど疲弊していた。

数では優位でも、満身創痍の一人と一匹。対するはまだ余力を残したエリート一体。

このまま戦えばこちらが殺されてしまう可能性の方が高いけれど、何故だろうか。私の内心から溢れ出るのは焦燥感や危機感などではなく、純粹な高揚感だった。

視界は霞んでいても、獲物だけはその細部までハッキリと見えた。

「ウフ、アハハハハハ！ 何だろう、これ、凄く楽しいッ」

それが何だか可笑しくて、私は大きく笑っていた。

このような危機的状況ですら、不思議と今の私にとっては娯楽のようにしか感じられない。それも可笑しさを助長しているに違いない。

今の私の状態は、誰が見ても変だと思っだろう。私だってそう思う。

コレが何かとあえて言うなら、それは狂喜に違いない。

私は極限状態の戦いが、狩猟が楽しいのだろうか。まさにそうなのだろう。

狩るか狩られるか、そんな命のやり取りはそもそも楽しいモノなのだから。

「ロボロ、ロボロッ。あと少し、頑張るよッ」

獲物を狩るのは楽しい。自分が鍛えた力で、標的にした獲物を狩る。

弓矢で心臓を射抜く。ナイフで動脈を切る。仕掛けた罠に誘い込む。意識外から奇襲する。

それぞれにそれぞれの良さがある。

手段や過程がなんにしる、命を奪い、命を貰うという結果には変わらない。生きる為には他者の命を譲り受けることが必要であり、それはとても尊いことだと思っ。

狩りで得た獲物の肉は、苦労した分だけより美味しくなる。そうして美味しく食べた獲物が自分の血肉となって、共に生きていく。またいつかは私も狩られ、世界へと還元されるのだろうか。

それは世界の在りようだ。

「少しで良い、隙を作って」

そして逆に、狩られそうになるのも楽しいものなんだと、今回のことでよく分かった。

追いつめられるのは怖い、けど生きる為を考え、足掻くのは楽しい。

周囲を全て敵で囲まれるのは怖い、けど活路を見い出し、こじ開けるのは楽しい。

殺されかけるのは怖い、でも返り討ちにし、敵の意表を突くのは楽しいのだ。

敵が全力で私に向かってくる、殺そうと全力を尽くしてくる。

それに私は応える。だって死にたくないから。死にたくないから抵抗する。

命は尊い、だから殺してはならない。そんな綺麗な言葉を並べたって、誰もが何かしらの命を糧かに生きている。

生きるということはそういうことで、これまでもこれからも変わらない。

どうせ他者の命を糧にするのなら、今のように狩るか狩られるか、狩猟の場に居たいと私は思った。

誰かが代わりに搾取した命を貰うよりも、私が直接その命を狩りとって、一切を損なうことなく貰いたい。

つまり、ただただ純粋に、命のやり取りをしたい。

立ち読みサンプル
はここまで

その為なら理由なんてどうだっていい。自分の為でも、誰かの為でも。そこまで考えて、ふと気がついた。

「……ああ、そっか。家族の為に、何てのは方便だったんだ。いや、本心ではあるけれど、それよりも」

病弱な母親。幼い妹。それを養う、ということが本心には間違いない。家族を養うことは私が望んだことで、また義務でもあるのだから。

けど、養うだけだったら他にもやりようはあったはずだ。

自慢ではないが、族長の息子で私より二歳年上の、私に近い才能の持ち主であるグン・タムから、嫁に來い、と言われたこともある。いや、今でも言われるので、言われている、というのが正しいか。

ともかく、グン・タムの嫁になれば、二人を養うことはできただろう。

でもその話を丁重に断り、今のやり方を選んだのは――

「私はただ、狩猟が好きなんだ。命のやり取りがあるからこそ、生きていると実感できる」

私達イル・イーラの民の女は、自分より強い者に嫁ぐ風習がある。グン・タムはその条件を満たすか微妙なところがあつたから断つた部分もあるけれど。

無意識ながらきつと、ただ狩猟がしたい、という思いが強かつたからに違いない。

何とも凶悪で、何とも冷たく血に濡れた本性だ、と内心で自嘲する。

それでも、そういう存在なんだと認識しても悪い気分にはならなかつた。むしろハッキリと自分という存在が分かつたことで、ホッとさえしている。

「さあ、やろう。どっちが死ぬかは、運次第ってことで」

無茶な使い方^はで刃^は毀^はれの激しい解体ナイフを鞘に仕舞い、真新しい戦いの傷跡が目立つ【バルバルドの風弓】に残り僅かな矢を番える。

唐突に脳内に響いたのは、短くも尊き神の声。

「ラン・ベルは【狩猟の神の加護】を新しく獲得しました」

それと同時に、まるで全身が新しい何かに生まれ変わるような不思議な感覚がした。

萎^{しな}びたように力の入らなかつた四肢に活力が戻る。五感はより鋭敏となつて世界を明瞭に感知し、意識しなくても周囲を認識できる。

しかも、特別な力によつてその他も強化された私は、新たな【戦技】をも得たらしい。

とてもいいタイミングだった。これでまだまだ戦える。血化粧の施された顔で、エリートに向けて微笑む。